

寺田寅彦～定説・思い込み・気になること～

四宮義正

寺田寅彦の作品や研究文献を読んでいると??と思うことが時々ある。固よりはっきりした結論が出ないこと、とりとめのないこともあるが、いくつか書いてみようと思う。

1. 「団栗」と「どんぐり」

榎 73 号のアンケート〔私の好きな寅彦の随筆〕で他を引き離して一位になったのが「団栗」であったが「どんぐり」が混在していて?と思った。表記の変遷^{へんせん}を調べてみると、ホトトギス（明治 38 年）、藪柑子集（大正 12 年）、寺田寅彦全集（昭和 11 年、昭和 25 年）、岩波文庫版寺田寅彦随筆集（昭和 22 年）までが「團栗」である。小型版寺田寅彦全集（昭和 35 年）になって初めて「どんぐり」となっている。これは後書で「現代の学校教育で習う文字の知識で読めるように現代表記にした」と説明している。岩波文庫版寺田寅彦随筆集も昭和 38 年の改版にあたって、小型版全集を底本として現代表記に改め「どんぐり」としている。しかし新編集の寺田寅彦全集（平成 8 年）では「団栗」と漢字に戻している。

小型版全集の後書には「現代表記に直すということは簡単なようであるが、実際に当たってみるとそれほど簡単ではない。当用漢字にないからと言って、かなに直してしまうとかえってわかりにくいものもある。そこでもとの漢字を保存して読み方をつけたのがかなりある。」と記されている。それならば、「どんぐり」は「^{どんぐり}団栗」として漢字を残してもらいたかったように思う。

また『花物語』の中の「常山の花」の読みも気になる。初出のホトトギス（明治 41 年）には「^{クサギ}常山」とあるが藪柑子集ではルビが省かれている。これはやっぱり「クサギ」と読みたい。ジョウザンとか、コクサギというのは著者の思いと違うのではないだろうか。「凌霄花」、「竜胆花」も同様に「のうぜんかずら」、「りんどう」で良いのだろうか。

2. 「団栗」のみつ坊は女の児か？

こんなことを言うと寅彦ファンから「何を血迷ったことを」と叱^{しか}られるであろう。寅彦作品の愛読者であれば作者の実生活をよく知っており、団栗を拾ったのは妻の夏子さんであり、その娘である貞子さんであることは周知である。しかし、もともと小説として発表された作品であるし背景を全く知らないで読んだとしたらどうであろうか。古くは女兒にも用いた（広辞苑第 6 版）とはいえ、普通一般的には男児として「みつお」や「みつひこ」が頭に浮かぶような気がする。

『花物語』の「芭蕉の花」には俊坊が出てくる。このモデルは寅彦の長男・東一さんと目されているので当然男児であろう。「常山の花」で^{かぶとむし}兜虫をもらった子供はどちらだろうか？虫好きだから男児のようでもあるが女兒かもしれない。皆さんはどちらだと思ったでしょうか。

3. 「団栗」と『橡の実』

『橡の実』は最後の随筆集であり寅彦死後の出版である。小山二郎（本名は久二郎）が書いたと思われる『橡の実』巻末の宣伝文によれば、その書名は寅彦生前の命名によるとのことである。

小宮豊隆は「『橡の実』のはじめに」で「『柿の種』と対にする為の命名であるに相違ない、蕉門では橡の実が愛されていたようであるが、寺田さんがそのことを承知していたかどうかは分からない」と記している。

植物のトチの実は一般的にはドングリに含まれず、見かけはクリに近い。しかしドングリに類似的な形態でもある。二種類の実を見比べていると、『橡の実』という書名はまことに（寅彦随筆の）首尾一貫であって、その奥底には団栗の妻である夏子への思いが潜んでいるのではないだろうか、という思いが湧き上がってくる。

4. 寅彦の初期の作品は「写生文」か？

寅彦の人物紹介によく写生文のことが書かれている。例えば、高知県人名事典（新版、高知新聞社、平成11年）には『「ホトトギス」に「団栗」「竜舌蘭」などの写生文を発表』と記されている。写生文については多くの研究書が出ているので、いくつか読んでみたが写生文とそうでない文との違いは分かりにくい。乱暴かもしれないが素人が理解したことを簡単にまとめると、もともと正岡子規、高浜虚子を中心とする「ホトトギス」の俳人たちの間で始まったもので、俳句の方法から発した散文におけるその応用→客観的描写→「写生文」という独特のジャンルを創造→主観的写生文へと進化し、最後は小説に収斂されてしまった、ということになるように思う。

夏目漱石も「写生文」について書いている（読売新聞、明治40年）。無理に要約すると、「何となくゆとりがあり、客観的で、筋のない、人生観の出ている話」ということのものであるが、流石に漱石で「二十世紀の今日こんな立場のみに籠城して得意になって他を軽蔑するのは誤っている。」と付け加えるのを忘れていない。

寅彦の初期の作品の神髄を伝えている文として伊藤整の解説がある。

『この作品〔団栗のこと〕を見ても分るように寅彦の文章の特質は、その実生活の体験に密着していること、同時に科学者としての細緻な観察眼が「ホトトギス」流の写生と融合して、明晰で美しい独特な世界を作っていることが分る。しかしその背後にあるのは、澄んだ暖かいヒューマニズムであって、それが科学的な冷たさや、写生文の客観と結びついたために、かえって彼の精神の世界の美事な秩序を文章として作り出しているのである。

（略）寅彦の散文はこの時期までは、小品文と筆者自ら考えていたものであるが、「団栗」、「やもり物語」のようなものは小説としても十分読み得るものであり（略）「花物語」は一種の観察記録ではあるが自己の生活の記憶と渾然と一体化して、自から自伝小説の体をなしている。その幽艶な出来栄は、この作者の科学者の素養と詩人としての資質の美事な合成になるものとして、高く評価されるべきものである。』（現代日本小説大系第17

巻、河出書房、昭和 26 年)

また寺田透は書いている。『「竜舌蘭」は、正にある時代、作中の年代記述を信ずるとすれば明治三十年代前年の思い出を甦らせ、描く作品でありながら、いわば個人の中から汲み出せる超歴史的なものだけを抛りどころとしているために、古びようがないのではないかと思う。』（日本現代文学全集第 35 巻の作品解説、講談社、昭和 41 年）

寅彦の文章はどれも今でも新鮮であり少しも古さを感じない。歴史的分類としての「写生文」は一定の価値はあるのかもしれないが、時代がかったジャンル名であり、言い古された便利なレッテルになっているように思う。寅彦の作品に^{ふさわ}相応しい現代的表現がないものだろうか。

(注：夏目漱石、伊藤整、寺田透の文は漢字、かな遣いを一部修正した。)

5. 寅彦は寅の日の生れか？

寅彦の名前の由来として、寅年寅の日生まれ、と書いた文献を見かけることがある。早いものでは岩波書店の全集科学篇（昭和 14 年）の藤原咲平による英文伝記「A BIOGRAPHICAL SKETCH OF TORAHIKO TERADA」であろうか。

今ではインターネットで過去の干支が検索できるサービスがあるし、古い暦の閲覧も可能である。そこで明治 11 年 11 月 28 日の干支を調べてみると年は寅だが日は^{いぬ}戌であった。

太陰暦から太陽暦への切り替えは明治 6 年 1 月 1 日であるので、旧暦の関係であるとも考えにくい何か他の要素があるのかもしれない。

6. 寅彦の卒業した小学校

岩波書店の新版全集第 17 巻（平成 10 年）の年譜によると、明治 16 年土佐郡江ノ口小学校へ入学、途中の東京への転校と復帰を挟むが、24 年 7 月末に高知県立尋常中学校の入学試験に失敗。25 年の 9 月同中学校へ入学、成績抜群によって 2 学年に編入される。と書かれている。何となく江ノ口小学校から中学校に入ったような印象を受けてしまう。

寅彦の明治 25 年の日記（新版全集第 18 巻）の冒頭には、「春秋之夢」と題して生い立ちの記が書かれている。そこには「余ガ六歳ノ歳初メニ土佐郡江ノ口小学校ニ入学シ修学スルコト四年^{ばか}許リ土佐郡第一高等小学校ニ入ル」とある。また「吾が中学時代の勉強法」（談話）では「自分の出生地は高知県で、始め中学の入学試験に応じたのは十四の年、丁度高等三年生の時であった。その中学というのは今の高知県立第一中学である。日頃身体があまり健康の方ではなく、それに勉強も碌々せなかつたためだろう、その時の入学試験は見事失敗に終わってしまった。」と言っている。

江ノ口小学校で出した「江ノ口小学校百年のあゆみ」（昭和 49 年）によれば「昭和 20 年の空襲による全焼、昭和 38 年の学校火災等で学校の公簿類は殆ど全焼し、その沿革を詳らかにすることが出来ない」とある。しかし高知市史（大正 9 年）、高知市誌（大正 15 年）によれば現在地（新本町 1 丁目 8-12）へ移転したのは、大正 10 年から 13 年にかけてで

あり、寅彦が入学した頃は旧百軒町付近にあった。現在の場所としては江ノ口市民図書館（愛宕町 1 丁目 10-7）の北側の道路を挟んだ向かい側付近である。これは「高知城下町読本（改訂版）」（平成 16 年）の明治 26 年地図で確かめることができる。

高知市史（中巻、昭和 46 年）によれば、明治 20 年 2 月の改定「高知県小学校規則」によって尋常小学校と高等小学校に分けられ修業年限はそれぞれ 4 年と定められた。この規則によって同年 8 月に土佐郡第一高等小学校が帯屋町に開校された、と書かれている。この時、江ノ口小学校は江ノ口尋常小学校となったのである。（高知市史（大正 9 年）では土佐郡第一高等小学校は追手筋に建てられた、とある。）

まとめると当時の学制は 9 月入学 7 月卒業であり、寅彦の修業は江ノ口小学校（江ノ口尋常小学校）4 年間、土佐郡第一高等小学校 4 年間、高知県尋常中学 4 年間（本来 5 年間であるが 2 年に編入のため）ということになる。しかし明治 16 年の小学校入学から明治 25 年の中学入学までは 9 年間あって勘定が合わない。この辺の事情は有馬朗人氏が「寺田寅彦随想（2）一漱石門下の逸材」（俳句 α あるふぁ、平成 26 年 6 月 7 月号）に詳しく書かれている。それによると氏が江ノ口小学校に聞いたところ寅彦は明治 21 年 7 月 20 日に同小学校を卒業したとのことで、番町小学校（東京）の 1 年間が考慮に入っていないのかよくわからない、としている。

7. 熊本における寅彦の初めての漱石宅訪問日

このことについては多くの研究書が明治 31 年 6 月末か 7 月初め頃としている。根拠はもちろん「夏目漱石先生の追憶」である。この追憶によると、第 2 学年の終わった頃に試験を「しくじったらしい」同県学生のために点をもらう運動委員に選ばれて初めて漱石宅を訪問したと書かれている。しかしこの追憶が書かれた（発表された）のは昭和 7 年 12 月とかなり後である。漱石が亡くなったのは大正 5 年 12 月であるが寅彦自身も胃潰瘍で臥していたことと衝撃が大きすぎて追憶を書くことはできなかった。昭和 7 年 9 月にもう一人の恩師・田丸卓郎が亡くなったことを契機として「田丸先生の追憶」と「夏目漱石先生の追憶」が書かれたのである。ふたつの追憶を読んでもみると五高時代の類似性にすぐに気がつくと思う。発表月はどちらも 12 月なので書いた順序は判らないが、依頼があって「田丸先生」を書いた後、この際ということで「漱石先生」を書いたような気がする。しかし多くの研究者が指摘しているように事実とは微妙に違う。漱石の方では夫人が名乗り出た竹崎音吉は親戚続きではないし、野並亀治は病気で試験を受けられなかったので田丸先生に試験延期を頼みに行ったのである。本人も「夏目漱石先生の追憶」で「おそらく時代の錯誤や、事実の思違いが色々あるであろうと思う。」と書いている。二人の師に関して（無意識あるいは不名誉なことなので意図的にせよ）記憶の混合、変容が無いとは言えないような気がする。明治 31 年であれば野並と田丸先生のごことは日記に詳しく書かれているのに漱石が全く出てこないのも不思議である。

別の資料として小宮豊隆宛て書簡（大正 7 年 6 月 26 日付）がある。そこには「小弟の第

五にはいったのは29年で30年の6月頃始めて先生の御宅を尋ねそれから俳句をやり出しました、卒業したのが32年の7月です」とある。また「俳諧瑣談（七）」（昭和9年）では「高等学校の1年から2年に進級した夏休みに初めて俳句というものに喰付いて、夢中になって『新俳句』を読み耽った。天地万象がそれまでとはまるでちがった姿と意味をもって眼前に拡がるような気がした。」と書かれている。

また明治31年1月10日の日記には「此日春陽堂懸賞俳句を出す。元より入選の野心あるとにはあらねど万一など思ふも果敢なき自惚うぬぼれと人に聞かさば嘲りなん。題は菜の花にて野に老て菜の花のみは見飽かざる 僧いおが庵菜乃花生けて茶もあるらし」とある。前年夏に漱石から俳句について教えを受けたからこそ、このような行動をしていると考えるのが自然なように思う。

荒正人「夏目漱石研究年表」（昭和49年、集英社）は初めての訪問日を明治31年6月末（推定）としていたが、荒の死後に出版された増補改訂版（昭和59年、同社）では30年7月初め（推定）、として1年早めている。

明治30年の日記が欠けているので確定的なことは言えないが、もう少し30年夏という説を考慮してもよいのではないだろうか。

（注：書簡、日記の漢数字をアラビア数字に修正した。）

8. 寅彦の学術論文数

岩波版全集科学篇の欧文論文数209と書いてある文献を時折見かけるが正確には211である。実際に科学篇を見ているのではなく新版全集文学篇第17巻（平成10年）に学術論文目録が出ているので、それを参照することが多いと思われる。これは論文に番号をふって年順に並べているが、意地悪なことに最後が209になっており、210と211は少し前に配列されている。よって最後の番号だけ見て209と誤解しているのだと思われる。（旧版全集第18巻の論文目録でも事情は同じ。）

欧文とあるのはドイツ語が6編あるためで他は英文である。ドイツ語論文は英語論文の翻訳であって訳者（ドイツ人と思われる）の名前も書かれている。このうち単著は101、残りは本多光太郎や中谷宇吉郎、多くの弟子達などとの共著になっている。また邦文論文数は58であってこの中にローマ字論文が5編ある。

論文集のページを繰ればドイツ語論文は英語論文と同じ内容のために題名だけで中味は収載されていないことが分るし、それ以外にも類似論文として題名だけのものや概要、抄録などもある。研究順に発表されたため分割されている論文も多い。このようなことで（意外なことであるが）寅彦の論文数の正確な算定は非常に難しい。また数だけ言ってもあまり意味がないように思う。しかし、やはり「科学篇」（全6巻）のボリュームには圧倒される。一般にこの科学論文集をひもとくことは非常に少ないと思うが、このような事情は知っておいてほしいと思う。